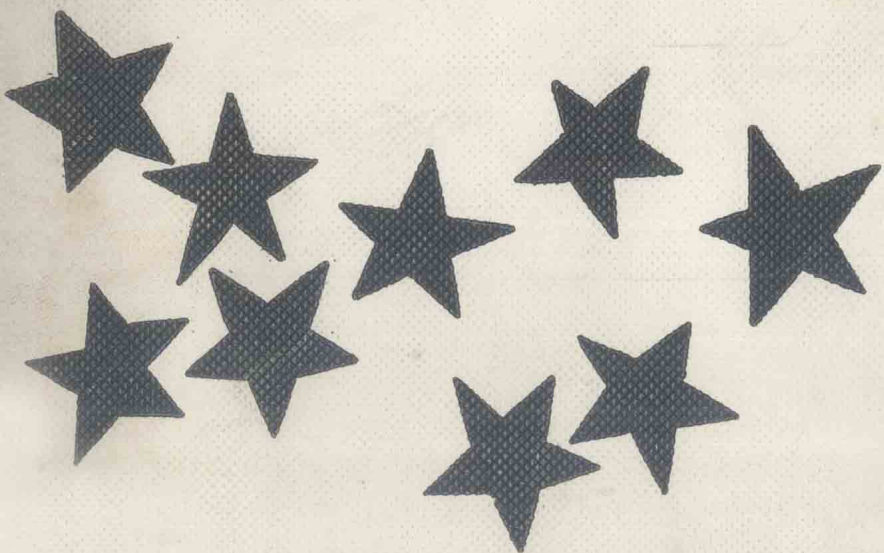


おかあさんぼくが好き？



著者紹介

林 昌子

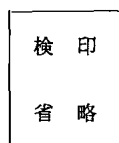
大正14年 神戸市に生まれる
大阪府立羽衣高女卒
昭和27年 結婚 現在に至る 二児の母
夫君嘉夫氏は西原衛生工業勤務
昭和28年 長男賢一出生
昭和32年 次男宣行出生

現住所 東京都渋谷区桜ヶ丘町82

おかあさんぼくが好き？

1965年 5月10日 発行

¥360



著 者 林 昌 子
発行者 坂 本 洋 子
印刷者 川 上 胖
発行所 株式 新 書 館
電話 (291) 1149
6877
振替東京 53723

おかあさんぽくが好き？

林 昌子・のぶゆき

新 書 館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

資料提供・編集協力

東京・渋谷鷺谷 さくら幼稚園

松村光子（園長）・梅村和子・米沢温子

岡田紀子・前田俱子・今井弘子

森下はるみ（体育担当）

編・企画

松村康平（お茶の水女子大学教授・心理学）

——表紙・イラストレーション 長谷川 淳——

はじめに

——連絡帳のこと——

松 村 光 子

(東京・渋谷鷺谷さくら幼稚園長)

一番たいせつなもの、それは「連絡帳」ということになっていた園児がいました。

つい最近、あるおかあさまからは、「毎日、ラブレターを読むような、いそいそとした気持ちで、連絡帳をひらいたものでした」という感想が、伝えられて、ほほえましいような、心うれしさを、感じたことでした。

私どもは、開園以来、約十六年間、「連絡帳」を用いています。幼児教育には、家庭との連絡が非常にたいせつであるという考えからはじめ、大変手間のかかる仕事ですが、ながく続けているせいか、今ではそれが極くあたりまえになっており、時どき「もし連絡帳がなかったら、このこと(主として、ひとりひとりの子どものこと)を、家にどういうようにして知らせるのだろう」という疑問をもったり、不安になったりするほどです。

連絡帳の「幼稚園からのページ」には、「今週の幼稚園」という題名で、一週間の幼稚園の保育内容や出来ごとを、読みものふうに記し、そのあとに、事務的なおしらせをつづけます。また、そのほかに、「今週の問題」という、その週に主として扱った単元や出来ごとからおきてきた問題をあげ、それについての考えを述べます。そこまでは、とう写真印刷にして、連絡帳にはり、それにつづけて、子どもひとりひとりの行動の記録を、教諭（先生）がつけます。あるときは、遊びの様子、あるときは、よいことをしたときのこと、そのほか、ある期間に、どのように発達・成長してきたかを、記録したり致します。家庭からのページには、父母、家族が自由に記入して、本書の林さんのようにすばらしい家庭記録がなされていきます。また、子どものページには、子どもが毎週、自画像をかきます。子どもの写真がはられたり、時には子ども自身がなにか書いたりもします。

こうして、親、子ども、幼稚園（先生）の三者が参加して、連絡帳をもり立てていきます。何年かたって、それぞれの幼児期をふり返ったとき、身近かにいた人びとによって、自分自身の記録が、一生けん命な気持ちでしるされてあったことを知って、生活や人生のはげましになったら、どんなに有意義な「みのり」になることだろうと、毎年毎年、思いながら、今年も連絡帳を用いています。

本になるなんて

子供の動作や、話すことなど、目にとまったこと耳にしたことを、何気なく書きつづっていった幼稚園の連絡帳が、活字となり一冊の本になるなんて、思ってもみなかったことでした。なんだか面映ゆい、妙な気持です。

どんなことでも、子供の成長の記録として、大切な記念になるから、との園長先生のお言葉に同感して、長男のときも最初は意気込んで書きはじめたものの途中で挫折してしまつたことなど思いあわせて、二年間書き続けることなど到底できそうもないと思いながら、引込み思案の、集団生活になかなか馴染めそうもない次男の姿に、この子をよりよく先生方に知っていただきたい願いから、書きはじめた連絡帳でした。一冊二冊とノートがたまるにつけ、意外に面白い子供の姿を見出し、書くことに、最初ほど抵抗を感じなくなつてまいりました。子供というものは、おとなには考えも及ばないユーモアを身につけているものだと、このノートのおかげで知ることができました。書きとめておか

なければ、その場限りで消えさってしまったでしょういろいろのできごとが、連絡帳を通して、昨日のことのようになつて、たのしくなつて、思い出されます。年を重ねて行くほどなつかしさも増してくることでしょう。親にはわからない幼稚園での子供の様子など、こまごまとお書き下さった先生方、組を主に担当なさった米沢温子先生に今さらのように感謝の念がわいてまいります。何もかもあらゆることを、連絡帳に託して過ごした二年間でした。人の長い一生を通してみれば、二年間など一瞬の間でしょうけれど、はっきりした記憶として残らないであろう幼稚園時代の思い出を、子供にかわつてのこしてやれたことを、よろこびとしています。

この拙い記録を、一冊の本としてまとめて下さった、松村康平先生、出版社の方々、とくに担当してくださった岡田正吾さんに、厚く御礼申し上げます。

昭和四十年三月二十日

林^{はやし} 昌^{まさ} 子^こ

おかあさんぽくが好き? もくじ

はじめに

連絡帳のこと

松村光子

本になるなんて

林 昌子

春

泣かなくなるリボン

..... 一〇

キスっていけないこと

..... 一七

夏

おほえるまでうたわないよ

..... 三四

夜の海ってどんなかな?

..... 四六

プレゼントセールになっちゃった

..... 六一

秋

おかあさんはメス?

..... 七〇

死ななくなる注射

..... 八〇

雲と雷はお友だち

..... 一〇〇

冬

ぽくアフリカへ行きたい

..... 一二六

神さまは人間のの

..... 一三三

春

メスもすっぱいの……………一四三

ひとりで行ったんだよ……………一六〇

ぼくがえらんだ犬……………一六四

水たまりの中の空……………一七三

夏

わびすけ誘拐されちゃうよ……………一八〇

野生のかぶと虫……………一八七

波はどこからくるの……………一九一

秋

毛虫にさされてフトっちゃった……………一九六

でっかいコオロギ……………二〇六

ちがうよォ しんせつだよォ……………二一〇

冬

チューインガムの化石……………二二七

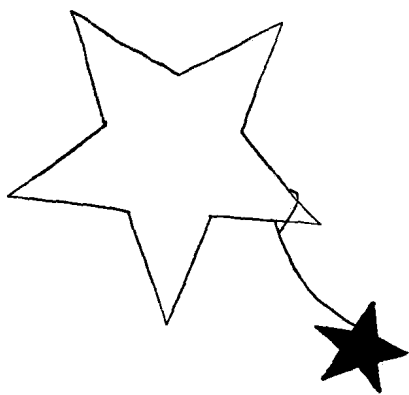
だって好きなんだもん……………二三三

にぎりえなんてイーライラするよ……………二四三

百円より高いダイヤ……………二五三

春

泣かなくなるリボン



泣かなくなるリボン

四月二十一日

お兄ちゃんがいろいろお世話さまになり卒園させていただきましたのがまだつい先頃のように思えますのに、はや弟がまたお世話になることになりました。賢一が麦組に入っただばかりのときのことなどを思い出して、もうあの頃は五年も前のことかと、感無量でございます。

宣行（のぶゆき）の方もまた泣きみそで、ご迷惑をおかけしているらしいでございますね。

「今日、ずっと泣いていたの？」

「うん、そう」

「どうして泣いたの？」

「泣きたくなったら泣いたの？」

「紙芝居あった？」

「うん、すずめの紙芝居」

「すずめだけ出てくるの？」

「うん、人間も出たよ」

「紙芝居のときは泣かなかったの？」

「うん、見えない、見えないって泣いたの。そしたら、先生が見えるところへ連れて行ってくれた」

「見えないときは泣かないで、自分で見えるところへ行けばいいじゃないの。胸に何かつけてくださったでしょう」

「うん、泣かなくなるリボンつけてくれた。はやしのぶゆきって、書いてあるの」

「リボンつけたら泣かなくなった？」

「うん、みんな、手をこうやってたたいてほめてくれた」

「それから泣かなくなった？」

「そのとき泣かなかったけど、あとでまた泣いたの」

「お歌は？」

「みんなうたったけど、ぼくだけさよならの歌も、うたわなかったの」

「明日はお休みだけど、月曜日にもまた泣くの？」

「泣かないよ」

「歌も、うたわないの？」

「うたうよ」

「泣くのなら、もう幼稚園、やめちゃおう

か」

と、いいましたら、やめるのは、いやだそうです。お兄ちゃんが、学校から帰って来ましたら早速、

「ぼく幼稚園行っただよ」

と、得意そうに話しておりました。

まだ、当分泣くことでしょうが、どうぞよろしくおねがい申しあげます。

宣行は、上にお兄ちゃんがおりますから、万事自分の思い通りにいかないことの方が多かったので、割合がまんしたり、ゆずったりすることを知って大きくなりました。だんだん我が出たり、すねたりごねたりすることもふえてまいりましたけれど、よく聞いて聞かせますと、納得するようです。お友達との場

合など、すぐ折れられなくてもしばらくすると「じゃあげるよ」とか、「じゃ見てもいいよ」とか、「かわりばんこにするよ」とかいって、また仲よく遊んでおります。また、お兄ちゃんと遊んでいて、自分の思い通りにならないときなど泣きさわいでおりますが、知らん顔をしてほっておきますと、自然に機嫌をなおしてまたケロリとして遊んでおります。何かを片づけるときやりにくかったり、何かがなかなか取れなかったり、できなかったりしたときは、すぐにブツブツいって泣き声を出すクセがあります。相手にせずほっておくと泣き声を出しながらも自分でしてしまいうのですが「泣き声を出さずにやらない」と、たびたびいいまでも、なかなかおなり

ません。自分の大事なものや、遊んだあとの自転車など、この頃はいわなくても一応あとしまつをするようになりました。

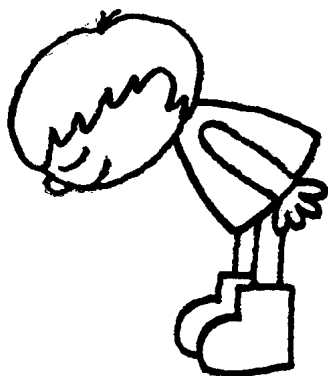
本を見ると、絵をかくことが大好きで、一応字はわかるのですが、絵本など自分で読まず「読んで」と、うるさくて仕方ありません。絵も画用紙一冊くらいはすぐかいてしまつて、包み紙も白いところはすぐ絵にしてしまいますので、包み紙が入用るときなど困ってしまいます。けれども、家とか、自動車、電車というものはあまりかかず、怪物ばかりかいております。何か動物をかいでも、みな口からけむりだの火だのを、シュウ、シュウ吐いているのばかりで、馬怪物、牛かいぶつ、さい怪物、くじら怪物などと、説明

のぶゆきちゃん、御入園おめでと
うございます。今日はお母さまから
離れて、元氣にお部屋に入っ
てくれましたね。

とてもえらかったですよ。

これから、今日のように元氣に、
さくら幼稚園にいらっしゃいね。

先生がたまっています。



してくれます。「心理学者の先生にでも見せ
たら、この怪物はお母さんを現わし、口から
吐く火はお母さんの叱言です、っていわれる
わよきつ」と、家中で笑っております。

動物では馬が一番好きで、お兄ちゃんが、

「のんちゃんは、とり年だよ」

と、いうと、

「ちがうよ。ぼくは馬年だよ」

と、ガンとしてゆずりません。

氣が弱いというか、よそのお家でも行きつ
けたところでは大いばりですが、おなじみの
ないところではひっこみがちで、親のそばが
離れられません。知らない場所でも、大勢の
前でも、ちゃんと自分が主張できるよう、ご
指導いただけたら幸いと存じます。

先生からのおたよりの、「のぶゆきちゃん云々」というところを読んで聞かせましたら顔つきが急にパッと明るくなって、大変うれしそうでした。眼を輝かせた、というような表現は、こういうようすをいうのかしらと思いました。

四月二十四日

毎日、出かけるのがとても気が重いらしくまだ幼稚園は楽しいところではないようです。青菜に塩のように、しおしお歩いて行きますが、帰りは大変元気で大声でドナったりしてたのしそうに帰ります。

「ぼく幼稚園に行くとき心配なんだよ」とか、「幼稚園でどうしていいかわからな

いんだよ」とか聞いております。

「昨日も今日も、チューリップの歌はうたわなかったけど、さよならの歌は、うたったよ」と、聞いておりました。

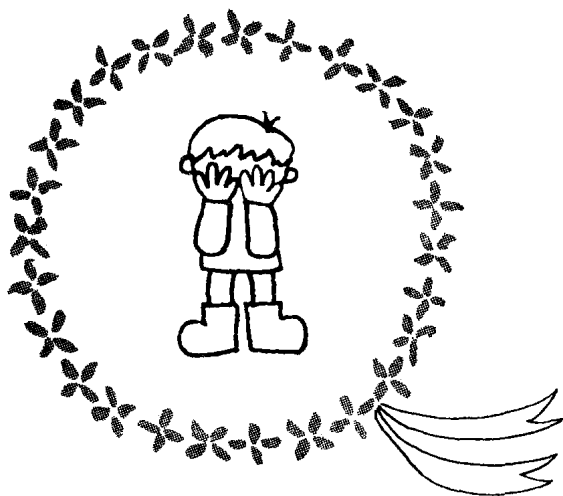
夕方思い出したように、

「ぼくだんだん泣かなくなったでしょう」と、聞いておりました。

四月二十九日

一日欠席しましたあと、急に元気になったように思います。まだ馴れないうちに休みしてどうかと思っておりましたが……。

金曜日に、洋服をどろんこにしましたときはいろいろお世話さまでございました。帰ってから、



「先生って親切だねーエ」

と、感にたえないように申しました。

「そうよ、だから困ったときはなんでも先生にいえばいいのよ」

といいましたら、

「うん、わかった」

と、いつておりました。土曜日の朝、園のお庭のタイコ橋のような鉄棒のところで、

「ぼく、幼稚園おもしろくなっちゃった」といいましたが、その朝は出かけるときも洪々出かけるといったようすでなく、お友達をさそうときの呼び声も、張り切っているように感じられました。金曜日頃から、なにか自信のようなものができたらしく、いったり、したりするようすも、何か威張ったような(?)